

医療タイムス

週刊医療界レポート

2010.7/5 No.1972

特集

病院広報の絶対条件 ブランド力と院内結束力の強化を!



タイムスインタビュー

実効性のある基本計画策定を見据えた
脳卒中对策基本法を作りたい

民主党衆議院議員
脳外科医

石森久嗣氏

グラフ北から南から No.226

医療法人社団大坪会

三軒茶屋病院

(東京都世田谷区)

冬の時代の診療所経営 第4回

開業医の悩みの半分は看護師確保



医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医会前会長。医学博士。著書「町医者力」「バンドラの箱を開けよう」(エビック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

診療所や在宅現場での看護崩壊

「誰か看護師を知らないか？」という切羽詰まった依頼を開業医仲間からよく受ける。「当院も足りなくて困っているんだ」と答えている。7対1看護のあおりを受けて、地域で働いていた多くの看護師が大病院に流れた。いくら看護大学がたくさんできて、4年制教育を受けて診療所で働こうという看護師は稀だ。仮に働いても長くは働いてくれない。

診療所だけでなく、訪問看護ステーションも慢性的な看護師不足に陥っている。診療報酬を少し良くしたところで、肝心の看護師がいなければ、一部の看護師に過度の負担がかかりバーンアウトするという悪循環が繰り返されている。「医療崩壊」は病院の話とは限らない。実は「診療所や在宅現場での看護崩壊」という側面もある。開業医と勤務医は、それぞれ自由度とステータスで対比できるかもしれない。しかし、診療所の看護師と病院の看護師を比較すると、前者の魅力がまだ不足している。夜勤がないことだけだ。ついに看護師確保をあきらめて、臨床検査技師と放射線技師を採用し、両者ができない「点滴と注射」は医師自らが行うという診療所が増えていくと聞く。

当院で行っている看護師確保のためのささやかな取り組みを紹介する。当院では子育て中の看護師が応募してきた場合、できるだけ看護師側の条件をのんで採用するよう努めている。完全週休2日制は当然として、研修費、研修旅行、親睦会にもささやかだが援助金を出してしている。診療所に勤務する看護師は、「いったん、最新医療から脱落したらもう二度と病院勤務には戻れない」という潜在的な不安を抱えている。その不安を払拭すべく、日々の院内研修のみならず業務とし

での学会参加や、時には病院研修も積極的に取り入れている。また看護学校の実習生を受け入れることは、看護教育への参画として看護師のモチベーションの向上に寄与する。

急性期重視が在宅看護を阻止

長い目でみれば、当院の教え子が一人前になって職員として働いてくれることもあり得る。診療所看護の醍醐味は、やはり患者さんとの距離感が近いこと、そして専門性にとらわれない総合的な看護ができることである。つまり町医者と同様のやりがいはある。面接時にはその点を強調している。また看護体験会も気軽に受けている。最近「託児所の確保」という要望をいただき、近隣の保育施設との交渉がやっと成立したところである。

開業医の悩みとは、半分は看護師確保の悩みであるといっても過言ではない。あまり表に出ない話であるが、本稿執筆を機会に、診療所の看護師確保にも医療政策の手当てを期待したい。7対1に象徴される急性期重視の医療政策が、慢性期医療や診療所の外来看護、そして国が推進している在宅看護を阻害しているという皮肉な現実にとろとろ目を向ける時だろう。看護師確保に費やしているエネルギーを医師本来の仕事に使いたいと願う開業医は、私だけではないはずだ。